

エッセイ＝実験 静かに貫いた

古井由吉さんをしのぶ

哲学者・柄谷行人さん

僕が初めて古井由吉の作品を読んだのは、1968年だつたと想います。最初の小説「木曜日に」がこの年の初め同人誌に



2月18日に82歳で亡くなった古井由吉（あるいは・よしきち）さん（中央）。中心になつた朗読会では、柄谷行人さん（右）、町田康さんらが参加した（東京・新宿のバー「風花」、2010年撮影）

載つただけで、彼はまだ作家とは言えなかつた。僕も批評家になつていなかつた。

激石論で賞をもらつ前の年でしたから。

古井の作品を読み始めたのは、中上健次が熱烈に褒めていたからです。中上と知り合つたのも68年で、彼がデビューする前の年でした。彼は、津島佑子らと一緒に同人誌で書いていた時期なので、他の新人の動向に敏感だったのでしよう。

僕も読んで感心した。小説というよりエッセイ的に書かれていて、その語り手が、熱病、不眠症みたいな状態にあって、そこからいつの間にか普遍的な構造がつかまれる。

僕も中上も古井より年少ですが、同じ

文学世代だという意識があつた。實際、僕が初めて論じた同時代の作家は、古井

です（71年「閑ざされたる熱狂」）。あれを書きながら、自分の居場所がわかつた気がした。だから、ずっと僕の中で生きているのは当たり前ですね。それは文學批評をやめても、同じです。

初めて彼と会つたのは、「卓子」で芥

川賞をとつた頃（71年）かな。昔から、おつとりした人でした。会つるのは、だいたい「風花」（新宿にあるバー）でした

が、彼はいつも静かに飲んでいて、僕が

酔つ払つてワーウー言つていても、彼はまったく変わらない。去年の秋に会つたときも、にこやかで静かでした。最後の

「文士」だと思う。

彼は80年代半ばごろ、小説らしい小説を書くのをやめたんじやないかな。一見

すると、エッセイ風です。しかし、エッセイとは、本来「試み」、「実験」という意味でしよう。その意味なら、彼の作品は常にエッセイだったともいえます。同じ頃、僕は文芸批評から離れて、

哲学や理論に向かつていった。「探究」と題する論考から始めて。それはエッセイなんですよ。古井さんも、そのことをわかつてくれていたと思います。

だから、同年代といえる文学者の中で、自分に一番近いのは古井さんだったような気がします。彼はエッセイ＝実験を静かに続けてきた。ものすごくラディカルな人でしたね。同時代に古井さんがいたことをありがたく思う。

（構成・滝沢文那）